

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00916

研究課題名(和文) 冷戦期イギリス文化外交における文化触変の理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Projection and Reception of British Culture During the Cold War: an Archival and Theoretical Approach

研究代表者

渡辺 愛子 (Watanabe, Aiko)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：10345077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、冷戦期のイギリス文化がソ連・東欧諸国に対してどのような意図をもって発信し、いかなる効果をもたらしたのか、実証研究と理論研究の両側面から解明しようというものであった。しかし、2020年に始まったコロナ禍により、英国公文書館における史料研究に支障が生じたため、イギリス文化の一例としてジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』の政治的利用と普及について研究することに時間を割いた。その結果、本作品がイギリス政府によるプロパガンダ戦略の一端として東側陣営に首尾よく渡っただけでなく、地下組織で積極的に受容・再生産され、体制打破のための指南書として機能していたらしい兆候を突き止めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジョージ・オーウェル最晩年の小説『一九八四年』は、全体主義批判の書として知られ、冷戦期西側諸国において対ソ連・東欧諸国への対抗プロパガンダ戦略として利用されていた点については、すでにいくつかの研究実績がある。一方、本作が東側陣営においてどのような社会的役割を果たしてきたのかについては、これまでほとんど見過ごされ、総括的に研究されてこなかった。よって、今回、この点を実証的・理論的に研究する可能性を見出したことに学術的な意義があるばかりでなく、文学が東欧革命という歴史的事象に果たした影響を社会に示すことには大きな価値があるといえるだろう。

研究成果の概要(英文)：At first, this research project intended to explore the intention behind and impact of British culture during the Cold War on the Soviet Union and Eastern Europe from both empirical and theoretical research perspectives. The project initially consisted of substantial archival research at the National Archives in the UK but was hampered halfway by the Corona Pandemic that began in 2020. Due to this, I was compelled to devote my time to studying the secondary sources including literary representation. By so doing, I found political use and dissemination of George Orwell's novel Nineteen Eighty-Four (1949) was worth investigating, because I was able to identify some signs that the novel not only successfully penetrated the Iron Curtain to Eastern Europe as part of the British Government's propaganda strategy, but was also actively accepted and reproduced by the underground, resistance groups, and functioned as an instruction book for overthrowing the regime.

研究分野：イギリス文化外交史

キーワード：イギリス文化外交史 冷戦期 実証研究 文化理論 ブリティッシュ・カウンシル ジョージ・オーウェル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

「冷戦」とは、第二次世界大戦後の世界秩序が形成されていった時期の米ソの対立関係を象徴した用語であるが、この構造は一般的にソ連（中心）が衛星諸国（周縁）に、あるいはアメリカ合衆国（中心）がイギリスを含めた西側諸国（周縁）へ及ぼした、力学の構図ととらえることができる。もっとも、このような二項対立的な図式に収まるほど実際の様相が単純でないことは、最近さかんに再検討がなされている、いわゆる「新しい冷戦史」研究が示すところである。本課題に関連した研究では、J. M. Lee, 'British Cultural Diplomacy and the Cold War: 1946-61', *Diplomacy & Statecraft*, 9/1 (1998) が、こうした研究の嚆矢かもしれない。Lee は、冷戦初期においてはイギリスがアメリカに先んじてこの世界的抗争の主要アクターであり、アメリカがその中心的地位を確立した後も、文化外交を利用して中心奪還の機会を狙っていたと推察している。議論の焦点がイギリス情報機関（IRD）に限られ、文化外交を包括的にとらえてはいないものの、このように覇権奪取をもくろむイギリスの動向に目を向けることは、ステレオタイプ化された冷戦像に縛られずに、新たな視点を持つための重要なきっかけとなったといえる。

また、M. Foucault の権力論では、「中心→周縁」という単純議論から脱し、むしろ「周縁→中心」へと向かう、抵抗する 'power' の様態が考察されている。ということは、冷戦期の「英」ソ関係にもとくに文化の力を利用して権力や支配的な言説に対峙する抵抗の能動的・多元的な様相を見てとることができるのではないか。さらに、ここには周縁としての文化が中心に鎮座する政治に抗し、これを圧倒するかのような契機やインパクトを見出すことができるのではないだろうか。以上が、研究開始時の本研究課題遂行者が着目した、問題の所在と学術的背景である。

## 2. 研究の目的

本研究では、上記のような問題意識のもと、冷戦期のイギリスがソ連と衛星国を相手に繰り広げた文化浸透の様相を詳らかにすることを目的とした。イギリスは、冷戦の中心的アクターとは一般的に認識されていないが、その非中心的な立場が、むしろ支配的な政治外交に周縁化された文化の抵抗を考えるうえで有効と思われる。大英帝国の解体を迎え、世界的影響力が衰えて周縁に追いやられていく状態にあったイギリスは、冷戦初期、東側諸国との政治外交においても閉塞状態に陥っていた。そんなイギリスが東側陣営に接近するための持玉として使用したのが「イギリス文化」だったのである。それは、ときに東側がブルジョア文化の象徴として拒絶してきた大衆的でモダンな文化であり、また、個人を尊重する自由で民主主義的な思想でもあった。つまり、イギリスは自国から持ち込む文化を「煙幕」のように用いることによって、実は当時の「リアル」で「リベラル」なイギリスの社会状況をも壁の向こうの若者たちに伝え、全体主義体制転覆の素地を醸成しようとしていたと考えられる。以上のような仮説に基づき、その実状について詳細に検証することで、複雑で巧妙な文化と政治の対立（干渉）／共謀（共振）関係の様態を解明し、この事象に理論的解釈を加えることでその妥当性を証明したいと考えた。

## 3. 研究の方法

議論の焦点となるのは、東側陣営との政治外交が行き詰まりを見せたこの時期、これを打破する糸口として行使された国民国家の代表としての「イギリス文化」が、いかなる操作や加工処理を経て東側に発信され、どのように受容され、またどのような効果をもたらしたのかという点であった。本研究課題では、①政府官庁内部資料や当時の定期刊行物の実証研究を礎に史実を精査するとともに、②表象としての文学作品から当時の主観的気運をとらえ、さらに、③現在、有用と目されている文化理論からこの時代を省察するという、実証的研究と理論的研究のふたつの研究手法を用いるものであった。

## 4. 研究成果

研究概要でも述べたとおり、本研究課題は2020年以降顕著となった新型コロナウイルスの世界的蔓延によって、その遂行に大きな支障をきたすこととなった。本来、①の調査を十分に推し進めたうえで、②および③に取り掛かる予定であったが、コロナ禍によって現地イギリスへの渡航がままならなくなったほか、渡航が可能となった際にも①の史料を所蔵する英国公文書館が閉鎖されたりしたため、研究計画の修正は不可避であった。そこで、一次史料の収集と精査に多くを頼ることなく、二次文献による研究遂行が妥当と思われる②のウェイトを上げ、そこに③の文化理論を適用できるかどうか吟味することにした。

②は本来、冷戦「当時の主観的気運をとらえ」るために、表象としての文学作品について考察するというものであったが、ジョージ・オーウェルの『一九八四年』（1949年）について調査を始めると、その研究自体が、実は本研究課題の目的を凌駕するような新機軸をはらんでいることを見出すことができた。この見解を導くこととなった経緯は、以下のとおりである。

- 1) 研究初年度の2018年度に、イギリスのタブロイド紙『デイリー・メール』（海外版）に関する研究機会を得（'Manufacturing the Market: Selling the *Over-Seas Daily Mail*, 1904-1919',

Essay Shorts of BKAS: Book Advertising Studies: <http://bkas.org/essay-shorts/>, 2019年3月刊行)、そこで「想像の共同体」を形成するオーディエンス(この場合は、新聞の読者)の重要性を再認識することとなった。

- 2) 同年度、大東文化大学大学院文学研究科からの依頼を受け、「権力崇拜の謎 ～フーコーの権力論から読む『一九八四年』～」という題目で招待講演を行い、久方ぶりにジョージ・オーウェルの『一九八四年』を読みなおす機会を得た。
- 3) 2020年、コロナ禍によって海外渡航が中止された期間、冷戦にかかわるさまざまな文学作品の表象について考察を進めたが、とりわけ気になったのが、オーウェル晩年の2作品『動物農場』(1945)と『一九八四年』(1949)に対するイギリス政府の政治利用であった。まず、先行研究から、両作品が冷戦期にイギリスの外務省およびその直轄調査機関であるIRD(Information Research department)によって東側陣営に秘密裏に送り込まれていたこと、西側諸国では東側陣営への対抗プロパガンダとして2作品の映画製作が行われていたことがわかった。しかし、『動物農場』の映画化と東側陣営へのプロパガンダ戦略についてはさらに詳細なリサーチが行われていた一方で、『一九八四年』の状況については研究蓄積が少なかったことから、2020年度は、いかなる経緯から50年代における本作の映像作品3本の「量産」にいたったのか、また、実際の1984年の再映画化がどうしてなされたのかについて、西側におけるオーディエンス(視聴者)へのインパクトを念頭に考察した。その研究成果が、翌年の2本の論考出版(「改竄される『一九八四年』～冷戦初期の映像三作品と原作、そしてオーディエンス」および「定点としての一九八四年と『一九八四年』の時空」、『ジョージ・オーウェル ～「一九八四年」を読む～』、秦邦生編(水声社))である。
- 4) 2021年度は、依然としてコロナによる厳しい制限が続いていたが、在外研究年度に該当していたため、年度の前半はこれまでにデジタル・データとして収集していた英国公文書館の一次史料を整理することに傾注した。秋より、イギリスのケンブリッジ大学での海外訪問研究者受入れが再開となり、しばらくぶりにイギリス入国がかなったため、ケンブリッジで研究をはじめた。その間、段階的にロンドンの英国公文書館での入場者制限も緩和されていったことから、折を見てロンドンにも赴いた。公文書館において冷戦期の政府史料を閲覧していた際、イギリス外務省の内部文書に「オーウェルの(Orwellian)」や『一九八四年』に出てくる「偉大なる兄弟(Big Brother)」、「二重思考(Doublethink)」、「ニュースピーク(Newspeak)」といった用語を複数見つけ、怪訝に思った。たとえば、在東欧諸国の英国大使館員がこうした小説上の「架空」の用語を使用していたことから、彼らもすでに『一九八四年』の読者であり、『一九八四年』というファインダー(あるいは「色眼鏡」)を通して東欧諸国を観察していたことがわかる(TNA, FO371/116560 在ワルシャワ英国大使館(1955年); TNA, FO 371/169194 在ボン英国大使館(1963年); TNA, FO 371/182731 在ブカレスト英国大使館(1965年)など)。また、ブルガリア政府が発した出生率の抑制に関する言い回しが小説中の表現に酷似しているように思われた(TNA, FCO 28/2861 在ソフィア英国大使館(1976年))。なぜ、公的な外交文書にオーウェルの名や小説の造語が使用されているのだろうか。実際にどれくらい引用されているのか。そしてそれはいったいなにを意味しているのか、という疑問が浮かんだ。さらに、相当数の反体制派知識人が現地で『動物農場』や『一九八四年』を「必ず読んでいた」という証言(Dan Jacobsen, 'The Invention of "Orwell"', *TLS*, 21 August 1998)や、ロンドン在住のラトビアからの亡命者をはじめ(*The Daily Mail*, 20 December 1954)、チェコスロバキアのサミズダート作家 Milan Šimečka や Jan Trefulka らが、本作と実際の東側諸国の状況の類似性(*The Christian Science Monitor*, 28 November 1984)を指摘していた点が思い出された。こうした事例と併せて、2021年に出版した西側陣営における『一九八四年』の映像諸作品に関する上記の拙論を踏まえると、東側陣営のオーディエンス(読者)の反応や動向を詳らかにすることができれば、本研究課題は当初の目的を超え、東側陣営の反体制派による象徴的で能動的な行為についても解明することができると考えた。すなわち、『一九八四年』という作品が、西側で消費されてきた反共産主義プロパガンダとはまったく異なる、むしろ当時の東欧全体主義社会を転覆させる革命の可能性を示唆した希望の手引書のような存在として機能していたというものである。
- 5) 冷戦当時の東側諸国における革命的な機運とそのアクターの動向に目を向けるきっかけとなったのは、1950年に死去した作家オーウェル本人による言論ではなく、戦後、左翼的な歴史家として冷戦期を生き抜いたエリック・ホブズボームの伝記翻訳であった(2021年刊行の共訳書、リチャード・エヴァンズ著『エリック・ホブズボーム: 歴史の中の人生』(上)(下)(木畑洋一監訳、原田真見・渡辺愛子・芝崎祐典・浜井祐三子・古泉達矢訳、岩波書店)〔原典: Richard J. Evans, *Eric Hobsbawm: A Life in History* (Oxford: Oxford University Press, 2019)〕)。ケンブリッジでは、著者のエヴァンズ教授にも面会する機会を取り付け、教授よりホブズボームの思想について、直接伺うことができた。
- 6) コロナ禍の影響により研究期間を延長した2022年度は、2021年度の在外研究での成果を整理し(2022年7月、日本オーウェル協会例会において基調報告「LockDOWN and OUT in Vienna and Cambridge～ウィーン・ケンブリッジ滞在記～」を行い、12月にはオーウェル刊行物の書評論文「川端康雄著『ジョージ・オーウェル―人間らしさ』への讃歌一」、『英文学研究』(日本英文学会)、第99巻が刊行)、現在は、本研究課題から発展的に生まれた、さらに大きな視座、すなわち、文学作品という「虚構」が、冷戦期の東西両陣営にもたらし

た政治的作用の検証（これはレイモンド・ウィリアムズの提唱する文化唯物論を例証するものでもある）、ならびに、東欧革命という「史実」に与えた影響について究明すべく、研究中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 牟田有紀子 & 渡辺愛子	4. 巻 -
2. 論文標題 「イギリス・イメージ調査～最終報告～」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 (個人HPにて配信)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Keith Hanley & Aiko Watanabe	4. 巻 3
2. 論文標題 'Kokka, Okakura Kakuzo and the Aesthetic Construction of Late Meiji Cultural Nationalism'	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 WIAS Discussion Paper	6. 最初と最後の頁 e-journal
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aiko Watanabe	4. 巻 --
2. 論文標題 'Manufacturing the Market: Selling the Over-Seas Daily Mail, 1904-1919'	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Essay Shorts of BKAS: Book Advertising Studies	6. 最初と最後の頁 e-journal
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺愛子	4. 巻 99
2. 論文標題 書評論文) 川端康雄著『ジョージ・オーウェル 「人間らしさ」への讃歌』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『英文学研究』(日本英文学会)	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Aiko Watanabe
2. 発表標題 Selling the Daily Mail Overseas: Real and Imagined Ex-pat Communities'
3. 学会等名 Book Advertising Studies Workshop (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 渡辺 愛子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 22
3. 書名 「改竄される『一九八四年』～冷戦初期の映像三作品と原作、そしてオーディエンス」, 『ジョージ・オーウェル～「一九八四年」を読む～』	

1. 著者名 渡辺 愛子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 6
3. 書名 「定点としての一九八四年と『一九八四年』の時空」, 『ジョージ・オーウェル～「一九八四年」を読む』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔招待講演〕 2019/02/28 「権力崇拜の謎～フーコーの権力論から読む『一九八四年』～」, 英文学研究専攻特別講義(招待講演), 於: 大東文化大学大学院文学研究科
〔共訳書〕 2021/7/6 リチャード・エヴァンズ著 『エリック・ホブズボーム: 歴史の中の人生』(上)(下) (木畑洋一監訳, 原田真見・渡辺愛子・芝崎祐典・浜井祐三子・古泉達矢訳, 岩波書店), 上巻全330ページ(第4章「イギリス陸軍の左翼知識人: 1939年～1946年」, pp.163-213.を担当), 下巻全367ページ(第6章「危険な人物: 1954年～1962年」, pp.1-70.を担当) [原典: Richard J. Evans, Eric Hobsbawm: A Life in History (Oxford: Oxford University Press, 2019)]
〔基調報告〕 2022/07/16 「LockDOWN and OUT in Vienna and Cambridge～ウィーン・ケンブリッジ滞在記～」, 日本オーウェル協会例会, Zoom開催

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------